

お茶うけ 第66話

小倉遊亀と磨針峠

去る6月に東京日本橋の三越で、日本画家で文化勲章受賞者の小倉遊亀の「パリ展帰国記念 小倉遊亀展」が開催され、滋賀県立近代美術館所蔵の作品も数多く展示されました。私は、1984年に小倉遊亀の故郷の大津市にある滋賀県立近代美術館の開館記念「小倉遊亀回顧展」を観たときから、その暖かな画風に引かれ、以後折にふれて、その美術館にある小倉遊亀設展示室を訪ねるのを楽しみにしていました。

今回の三越での展覧会で、私は好きな「磨針峠」の絵に再会しました。

二曲一双の屏風に描かれた「磨針峠」の絵は、右の面に山道を急ぐ若い修行僧を、左の面に斧を担ぐ老婆(観音の化身と言われる)を配置して、向き合った二人の強い視線がぶつかりあって火花を散らしているような緊張感のみなごった作品です。

この絵は、次の情景を描いています。京の都での学業が思うように進まないで、諦めて故郷へ帰る途中の若い修行僧が、この峠にさしかかると、道端で老婆が斧を担っていました。修行僧が不思議に思って訳を尋ねますと、老婆が「針が折れてしまったが、持ち合わせがないので、この斧を担って針を作っている」と答えました。

この絵の元となった近江(滋賀県)の伝説によれば、老婆は修行僧の間に答えると、一瞬のうちに姿を消してしまいました。修行僧は、大きな斧を担って小さな細い針を作るという老婆の気迫に心を打たれて、直ちに都へ引き返し、再び勉学に励んで優れた僧侶になりました。後の弘法大師空海であったと言われます。

『近江の伝説』の本には、この「磨針峠」の話が、磨針峠を摺針峠、また老婆は老翁として記されています。旧中山道が通っていた摺針峠は、滋賀県のJR彦根駅の東北の方向にあります。峠の近くにある摺針明神は、斧を担っていた老翁を祀ったものといわれ、その境内には、弘法大師お手植えと伝えられる杉の巨木があります。

この「磨針峠」の絵を昭和19年(1944年)から2年間かけて描いた小倉遊亀は、「戦争中で、これから何年か筆をとることができなくなると思い、大きなテーマに取り組んでみた」と話しています。小倉遊亀の絵を2~3枚しか褒めなかった師の安田靉彦が、この「磨針峠」の絵を褒め、特に小倉遊亀が母の顔を写生して描いた老婆の顔がいい、それと修行僧のはかまの裾の動いている形がいいねと称賛したということです。

たしかに、この老婆の顔には、一つのことをあくまでもやり遂げるという強い意思がうかがえます。それは、戦況が厳しさを増すなかで、どういう事態になっても絵を描きつづけるという小倉遊亀の心の表れであると思います。

私は、ちょうど1984年に滋賀県の新しい会社に赴任しました。新しい土地で、どんなことが起きても、何とかやり遂げるぞと思っていた時期に、「磨針峠」の絵を観て大いに励まされました。それ以後、「磨針峠」は私の好きな絵の一つになりました。

1895年生まれで、104才になる小倉遊亀は、今も鉛筆を持ちつづけています。三越の展示会場に、小倉遊亀の「今絵が描きつづけられるという無上の幸せに心から感謝を感じている」という言葉がありました。いつまでもお元気で、絵を描きつづけ、たくさんの人を喜ばせていただきたいと思います。(敬称略)

以上

参考資料:

- 『開館記念 小倉遊亀回顧展』図録、滋賀県立近代美術館刊
- 『小倉遊亀 画室のうちそと』小倉遊亀・小川津根子著 読売新聞社刊
- 『近江の伝説』駒敏郎・中川正文著 角川書店刊

